夢中授業

?島イロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢中授業

【Ｎコード】
Ｎ３０８０Ｔ

【作者名】
？島イロ

【あらすじ】
登校拒否をしていた蜜樹は祖父の家に預けられていた。蝉の声を聞きながらぼうっと過ごす毎日。ある日、祖父は蜜樹を夢守神社という場所へ連れて行く。ここでお祈りすると素敵な夢が見られるという祖父の言う事を半信半疑でお祈りをする蜜樹。その夜、蜜樹は夢を見る。夕焼けで紅く染まった古めかしい町。そこに若い青年たちがいた。「みっちゃん」と呼ぶ一人の青年。「おじいいちゃん？」

1

1

私はとにかく学校に行きたくなかった。周りからは根掘り葉掘り理由を訊かれたが、いろんな原因があるので説明しづらい。友達のことだったり、進学のことだったり、両親のことだったり。なのではぐらかしていたら、とうとう親も愛想を尽かしたようで私を丘の上の祖父の家に預けられることになった。

祖父の家は古い日本家屋で、庭からは町が見下ろせる。近所には祖父の知り合いの老人ばかりでとても静かだ。煩い世間から隔離されたようでとても落ち着く。毎日毎日、町が見える縁側でぼうっと過ごしていたら、ある日祖父から「ひまか」と訊かれた。とても暇だった。

「みっちゃん、おじいちゃんについておいで」

祖父の優しい手招きにおびき寄せられ、何も考えずに着いていくことにした。玄関から出ると、蝉の鳴き声にまみれた雑木林の中をゆっくりと歩いていく。祖父は昔、軍人だったらしく七十をこえても背筋がしゃんとしている。

林を抜けると目の前に石造りの苔むした階段が現れた。百段ほどあるはずの階段を祖父は難なく上っていく。私は途中で何度も立ち止まってしまった。

上りきると塗装の剥げた鳥居があり、その奥に古ぼけた小さな社があった。祖父は社の前に立つと、私に五円玉を渡した。

「みっちゃん、ここは夢守神社と言ってね、お祈りすると素敵な夢が見れるようになるんだよ」

「ほんとうなの」

私が訝しげに社を眺めていると、祖父は先にを入れて鐘を鳴らし

た。私もならって賽銭箱にお金を入れて鐘を鳴らす。静かな境内に鐘音が響くと祖父は祝詞のようなものを唱えた。私が聞き取れたのは「佐倉蜜樹を御身の世界へ……」の部分だけだった。私はよく分からないので「お願いします」とだけ祈った。

「これでいい夢見れるかな」

と訊くと、祖父はまた優しい笑顔で「大丈夫」と答えた。

半信半疑だったけど、祖父が神社に私のためになにかお願い事をしてくれたということだけで、まだ見捨てないでいてくれる人がいるんだと嬉しかった。

夜、布団に入りながらいい夢ってなんだろうと考えていた。

美味しいご飯をたくさん食べている夢、それとも世界中を旅している夢なのか。それともとても美しい景色が広がる世界を見るのか。画面いっぱいの星々、銀河と星雲ときらびやかなガスのかたまり。碧い光が照らしだす。茜色の雲が先の光から飛び出してきて身体をかすめてゆき、そのうちにフワリと雲の上に降り立つ。雲はやがて草原と変わり、空には真っ赤な夕陽が焼けついていた。足元を見ると丘の上に立っており崖下には瓦の古い街並みが並んでいた。道路は土がむき出して、あちこちの家からは煙が立ち上がっている。どこからか豆腐屋のラッパの音が鳴っていた。それなのに人の気配が全くしない。夢、これは夢。でもとても鮮明な景色だ。まるで誰かの思い出を覗いているかのようで居心地が悪い。

後ろを振り向くと人の良さそうな青年が大きく手を振っていた。おおいおおい、とこちらに呼びかけている。

「みっちゃん、みっちゃん、おじいちゃんだよ」

「おじいちゃん、なの」

目の前にいるのは皺も白髪もない若い男だ。でも、その優しい笑顔は祖父そのものだった。これが夢なのだとしたら、この人は祖父なのだろうと私は納得した。

「よかった、みっちゃんも来れたんだね。誰でも来れるわけじゃないから、みっちゃんは神様に選ばれたんだよ」
「ここは誰の夢の中なの、おじいちゃん」
祖父は少し驚いた顔をして「みっちゃんは賢いね」と言った。
「おじいちゃんの古い友人の夢の中だよ、こっちおいで」
今朝と同じように祖父の背中を追って、神社へと向かう。幼い時から、こうやって祖父のあとを追いかけまわしていた。父でも母でもなく、祖父の背中しか思い描くことができない。
夢の中の神社は少しだけ古い、といった感じだった。鳥居もまだところどころ朱色の塗料がついている。社の前の階段に四つの人影があった。一人、巨漢の男がいる。どこかで見たことのある顔だ。
「おおう、みっちゃんじゃねえか。みっちゃんも来れたんだな」
このしゃべり方、聞いたことある。
「もしかして、八百屋の大将？」
へっへっへと笑いながら鼻の下を指でこする仕草は確かに八百屋の大将と同じだった。でも私の知っている大将は頭がつるりと禿げていて、白い髭をあごに生やしているおじいさんだ。
「俺も昔はこうんなふうに髪の毛あったんだぜ」
と、ふさふさの頭をなでる。
「他のやつらは知らん顔だろ。一応こいつは篠崎病院の院長だが、会ったことはないだうなあ」
大将の目の前に座っていた青年が軽く会釈する。篠崎病院は町で一番大きな総合病院だ。行ったことはあるが院長には会ったことがないので、今の姿を想像することができない。
「で、こいつが関西で大手スーパーの店長やってる」
「もう引退したけどな」
院長の隣に座っている小柄な青年がおおらかな笑い声をあげた。生で関西弁を聞くのは初めてだ。
「んで、こいつがフミオ、目つき悪いけど怖がらなくていいぜ」
一番社側に座っている青年が大将を睨み付けた。片方の目は眼帯

で隠れているが、左目は大将の言う通り細目で冷たい印象がある。けれど悪い感じはしない。
「ハゲに言われたかねぇよ」
どうやら口は悪いらしい。
「はじめまして、佐倉蜜樹です。お邪魔させてもらってます」
私がお辞儀すると、店長が「やっぱりトシ子さんに似とるなあ、べっぴんやわ」と言った。トシ子は祖母の名前だ。もう数年前に亡くなっているのであまり記憶にないので似ているかどうかはわからないが、院長も頷いているので本当に似ているのだろう。
フミオは横目でちらりと私を見て、「まあ似ているかもな」と呟いた。
「みっちゃん、学校に行ってへんねんて？」
はい、と私は言ったがまたここでも理由を訊かれるのかと思うとうんざりする。
「まあ学校なんて行かんでもええねん。でも勉強はしといたほうがええやろ。ここには頭のえらい院長もおるし、ワシは一応店長やっとったから経済には詳しいで。大将は……なんや」
「俺は体育担当だ」
「フミオは作家志望やったから国文学が得意やな」
「古典しか教えられねぇけどな」
店長の説明に私は頭の中を整理した。今日はとても頭を使う日だ。
「つまり、ここは」
「夢の中の家庭教師、だね」
祖父はどこからか私の教科書やノート、文房具を取り出した。
「おじいちゃんは、なんも教えられることないけど」
「サクラはみっちゃんのお世話係だろうが、俺らにまかしとけ」
「みんな、ありがとうなあ」
祖父が頭を下げたので、私も「よろしくお願いします」と頭を下げた。
それから院長と私は社の階段で数学の教科書を広げて一時間ほど

勉強をした。院長も昼は自分の仕事をしているはずで、それなのに断ることもできない。それに、夕陽がとても綺麗で、コンクリートに囲まれている教室にいるよりも気分がよかった。この一時間は今までにないほどの集中力で院長の教えてくれたことを頭の中に叩き込んだ。

気が付くと、フミオ以外の人たちがいつのまにかいなくなっていた。祖父もいない。

フミオは賽銭箱の上に座って、ずっと煙草を吸っていた。

この日から、おじいちゃん達による夢の中の授業が始まった。

2

思えば夢の中で体育授業ってどうなんだろうと思っていたけど、大将は虫取りや川で魚を釣ったり、野に咲く花の名前を教えてくれる。今では大きなマンションが建っている場所に広い野原があり、大将はいつも懐かしそうに眺めていた。

店長は経済、というよりも政治を絡めた店の売り上げについて熱く語ってくれる。でも、おかげで新聞を読んでも少し内容が理解できるようになった。

フミオは……源氏物語を現代語訳にしながら読んでくれる。初めて源氏物語の内容がわかってきた。こんなにハーレムな話だったなんて驚きだ。

そういえば、他の人はいたりいなくなったりするけど、フミオだけはいつもここにいる。私が他の人の授業を受けているときは賽銭箱の上で煙草を吸ったり、その辺をうろついたりしていた。

「もしかして、ここはフミオさんの夢の中なの」

授業が終わって、二人並んで夕陽を見ているときに訊いてみた。

「そう、ずっと寝てるからな」

「ずっと？」

フミオはさっき吸い終わったばかりなのに、また煙草を取り出して火をつけた。火のつく瞬間、眼帯も燃えそうなぐらい輝いてから夕陽の赤色に染まり直す。

「俺たちは昔みんな飛行機乗りで、一緒に戦場の上を翔けていた。でも俺は右目を負傷して戦闘機に乗れなくなったんだが、いよいよ日本が危なくなってきたときに志願したんだよ。聞いたことあるか、特攻隊って」

私は黙って頷いた。

「俺は運悪く突っ込む前に被弾して墜落しちまった。どうやらそのときに寝たきりになっちまったらしい。今でも篠崎病院のベッドの上でずっと眠っているんだそうだ」
そうか、ここの風景が昔のままなのも、祖父たちが若いのも、みんなフミオの記憶が止まっているからなんだ。あれ、でもなんで私はフミオの夢の中に入ってこれたんだろう。
「それでお前のじいちゃんが、俺を退屈させないために夢守神社に参って夢の中で会えるようにしてもらったらしい。本当に昔からお節介野郎だったよ」
そう言いながらも、フミオの顔は穏やかだ。
「いいな、そんな仲間がいて」
私にはそんな人はいない。友達のために何十年も夢の中で会うような人なんて。
「こんなこと言ってごめんなさい。フミオさんはずっと……」
「別に、店長の話きいてると日本も随分変わっちまったみたいだし、俺は見なくてよかったのかもな」
フミオは煙草を消して「まあ……」と重ねた。
「娘の顔ぐらいは見てみたかったかもな」
「娘……」
「ああ、俺が志願した時にはもう腹にいたらしい」
「そう……か」

この人は、ベッドの上にいるこの人は祖父と同じ姿をしていて、奥さんや子供、もしかしたら孫までいるんだ。それなのに、それなのに会えない。胸に針が刺さったような痛みがした。
「私も、このまま夢の中にいられたらって思ったことがある。こんな綺麗な場所にいつまでもいられたらって。だって、私は現実に会いたい人なんていないし、あっちに戻っても毎日毎日わけのわからない不満が中に溜まっていってどうしたらいいのかわからなくて……」

どうして私は目覚めることができて、フミオはずっと夢の中にいなくてはいけないの。
「みつき、飛んでみるか」
私はフミオを見た。
「飛ぶって？」
「飛ぶんだよ、まだ腕は鈍っちゃいないぜ」
フミオが腕をぶんと振り上げると、どこからかプロペラのついた飛行機があらわれた。夢のなかって便利だ。
「お前は後ろな、ほらつかまれ」
フミオに手伝ってもらって後ろの座席に座った。座席を蓋するものがない。頭がむき出しで飛ぶのだろうか。
そう思っていたらゴーグルをくれた。それでも少し怖い。
「行くぞ」
プロペラが勢いよくまわりだす。煙が出て、オイルの臭いがした。前に進みだすと機体は上下に細かく揺れた。ぐんっとスピードがあがると、次の瞬間には真っ赤な空に向かって上昇中だった。
風が全部、私に向かって襲い掛かってくる。エンジン音とすごい風の切る音。
「どこ行きたい？　山か海か」
雑音が煩いのに、フミオの声は鮮明に聞こえる。私は「海！」と叫んだ。
「了解」
機体が斜めに傾き、滑るように進路を変更していく。町が遠のき、沿岸を走る汽車が見え、やがて海が目の間にひらけてきた。広い、とてつもなく広い海は今も昔も変わらない。そうフミオに伝えると
「そうか」と笑っていた。
「みつき、三時の方向見てみろ」
「三時ってどっち？」
「右だ右」
言われるがままに三時の方向を見ると、海鳥の大群が私たちと平

行に飛んでいた。ああ、こういう映画観たことあるなあ。海鳥たちはバランスを取りながら、ときどき翼をはためかせて高度を調整しているみたいだった。
海は夕陽でキラキラと輝いていた。眩しすぎて目を細めないといけないぐらい輝いていた。
フミオの世界は、とても綺麗。
「ねえ、フミオさん、あなたいつもこんな風景を見てたの」
しかし返事はない。さっきとは違い、フミオの背中には緊迫した雰囲気が漂っていた。どうしたんだろうと、もう一度名前を呼ぶと、
「しっかり掴まってろ」と叫んだ。
「くそ、こんな時に……」
いつの間にか海鳥たちは消えうせ、代わりにたくさんのプロペラ機があたりを飛び回っていた。下を覗くと海には黒い船が何隻も浮かんでいる。
そのとき、すぐ真横を煙を上げながらプロペラ機が墜ちていった。
ふみおーーーーーーーーたすけてくれーーーーーー
頭の中に響いてくる、聲。
撃ち落とされていく飛行機たちは、紙切れのように燃え上がり海に消えていく。
「これはなに？　これはなに？」
「落ち着けみつき、これは俺の夢だ。大丈夫だから」
「ゆめ」
「そうだ、だから目が覚めれば、こんなに怖いことはおしまいだ」
「おしまい、でも、あなたは」
「俺は大丈夫、もう慣れた、こんな夢」
「うそだ、慣れっこない、だって、あなたは墜ちていく仲間の声が忘れられないんでしょう」
「みつき、目を覚ませ」
「待って、フミオさん」

「これは夢だから」

「わかってる」

「でも、ほんとうにあったこと」

3

障子から淡い朝日が差し込み、天井の染みを照らしていた。枕と布団の感触、そして汗が額に滲んでいる。

起き上がって障子を開けると、庭に水をまいている祖父の姿があった。

「おじいちゃん、フミオさんは病院にいるの」

祖父は水を止めて振り返った。

「フミオから聞いたのかい」

私が頷くと、祖父は「そうかそうか」と呟いた。

「今も病院で寝ているよ。院長が責任もって診てくれている」

「会いに行ってはだめ？」

「フミオは会いたくないだろうね」

どうして、と訊こうとして言葉が喉の奥で詰まってしまった。病院のフミオは私と会いたくない、それは何となくわかるから。フミオにとって、あの世界が本当の世界だから、現実の自分のほうが夢のような存在なんだろう。

祖父が作ってくれた朝食を食べた後、数学の問題集をやることにした。少しでも予習をしておいたほうが院長の負担が軽くなるはず。

以前より勉強が苦痛ではなくなってきた。みんなが教えてくれるというプレッシャーもあるけど、私は今できることをしなくちゃいけないという気持ちになれたから。

夜が来て布団にもぐる。碧い光と急速に流れていく雲。気が付くと、神社の前にいる。今日は珍しく四人がそろっていた。でも店長がいない。

「みつき、大丈夫だったか」

フミオは心配そうに声をかけてくれたので、「大丈夫」と答えた。

「それで、あちらさんの御親戚の方はなんて」
「今日がヤマだそうだ。ずいぶん前から転移はあったらしいが延命治療を拒んでいたからな」
「なんで」
「家族に迷惑かけたくないからだとよ」
「ばっっか野郎だな、昔からあいつはよ」
大人の話をしている、みんな顔が翳っているので良い内容ではないみたいだ。今日は帰ったほうがいいのかな。
「なにしとんねん、雁首揃えて」
いつの間にか店長が真後ろに立っていたので、私は驚いて小さく声を上げた。
「店長、お前こんなとこにきて何しとんだ」
「そら、寝てるんやから来るわな。まあ、もうあんまり時間ないけどな」
店長は私の手を取り「かんにんな」と頭を下げた。店長の手がうっすらと透き通っている。
「ワシなお迎えが来たらしいねん。もうみっちゃんの勉強みてあげられへん。ほんまにかんにんな」
「店長、どこかへ行くの」
「そうや、ここよりももっと遠いところや。でもワシがおらんなっても、院長もフミオもいてるし勉強のことは心配せんでええ」
「私は、店長の話が好きだよ」
店長は目を大きく見開いてから、穏やかな笑顔に戻って「おおきに」と言った。
それから振り返って一人ひとり握手してから「さき逝っとるわ、ほなさいなら」とあっさりした挨拶を残して店長の姿は夕陽の中に消えていった。
「やすのりっ」
消えてしまった夕陽の光に向かって、フミオは叫んでいた。「人の話も聞かねぇで、昔からお前は……礼の一つぐらい言わせろよ」

遠くで不如帰が鳴いている。どこからか豆腐屋のラッパの音もする。あの音は汽車なのかな。
もう何十年も見続けていた景色を、残された四人は懐かしむように眺めていた。

翌日、朝食を食べながら祖父に言った。
「まだ学校へ行くのは怖いけど、勉強は続ける。だから夢の中の授業は卒業でいいよ」
「遠慮しなくてもいいんだよ」
遠慮、とは違う。祖父たちの負担をなくしたいという気持ちもあるけど、私が早く自立することによって店長やフミオたちが安心するなら、それなら頑張るしかないと思っただけなんだ。
そう伝えると、祖父は納得したように頷いた。
「よかったら、今まで通り夢の中へ遊びに来てほしいんだ。私たちはもう、いつ死んでもおかしくないから、フミオだけ残していきたくない……勝手なお願いしてしまうが」
私は元よりそのつもりだったので、異存はなかった。
「トシ子さんはな、私らのアイドルだったんだよ。店長も院長も大将も、もちろんフミオもこぞって猛烈アタックして」
「それで、おばあちゃんを射止めたのがおじいちゃんだったんだ」
「ダークホースだったらしい」
「おばあちゃんの気持ちわかるな、だって、おじいちゃんの優しさは天下一だもん」
祖父は顔をくしゃりとして「ありがとう」と言った。
「だから夢の中の若い姿のままで、トシ子さんに似とるお前に会いたいんだよ」
「うん」
「すまんな」
「ううん」

私は祖父の話を聞きながら、真っ赤な夕陽の下で煙草を吸っているフミオを思い出していた。
フミオが一緒に空を飛びたかったのは、本当は……

縁側で昼寝をしていたら、あたりが夕陽の赤に染まっていた。縁側に置いてある下駄をはいて神社に向かう。フミオが賽銭箱に座っていた。煙草は吸っていない。
「フミオさん、私、見つけられた。やりたいこと」
「へえ、なんだ」
「私も空を飛ぶ」
「女が飛べんのかあ」
「知らないの、今は女性でも飛べるのよ」
静かに笑ってから、私も賽銭箱に腰を掛けた。
「みんなのおかげ。院長と大将とおじいちゃんと店長と、そしてフミオさんのおかげだよ」
「俺は、なんもしてねぇけど。ま、前向きになれたんならいいや」
しばらく、二人とも何も言わずに流れる雲や風で揺れる木々を眺めていた。
視線を感じて振り向くと、フミオがこちらを見ている。
フミオの手がそっと、私の頬に触れた。
「ごめんな」
私はフミオの手の上に自分の手を重ねた。
「本当のお前の姿も見てみたかった」
「わかってたよ」
私は着物の袖で、フミオの涙を拭ってあげた。
だって、ここはフミオの世界。フミオの記憶にあるものしか再生されない。
「でも本当に似てるから、ここに来れたんだと思うよ」
「それでもみつきはみつきだ」

フミオは私を胸の中へ誘った。かすかに煙草の匂いがする。
私はたぶん、この匂いを忘れることはできない。

その日から二度と、赤く染まる夕陽の町へ行くことはできなくなった。

4

俺は先週こっぴどく振られてしまった。本当に酷い終わり方だった。

高校に入ってすぐに付き合いだした彼女だったが、どんどん可愛くなるにつれて変な虫がつきだし、しまいには浮気をされていた。いや、浮気なのか、俺が遊ばれていただけだったのか、とにかく彼女は何股にも渡って男どもと付き合っていたのだ。

それでも俺は馬鹿なんで「彼女はそんなことしない。だって俺の前でオナラすらしない純情な女の子だ」と信じ切っていたのだが（しっかり友人たちにも流布していた）、見間違えようのない決定的現場を押さえてしまったので、俺は相手の男の胸ぐらを掴んだらば、なんと彼女から大きな大きな平手打ちをくらってしまい「もう二度と会わない」とまで言われたのだ。

こんな感じでプライドも男の純情もずたずたに引き裂かれ、ここずっとベッドの中で過ごしていた。食物は親が握ってくれた一日一個のおにぎりだけ。何も動きたくない考えたくない。このまま苔むして人型の岩になってしまえばいい。

――おい

でも、ベッドの上で岩になったらどうやって外に出すんだろうな。窓からクレーン車で引っ張り出すとか

――おい、こら

そのまま綺麗な川のほとりにでも置いてくれたら、何も言うことはないね。

「このクソガキ起きやがれ！」

突然の怒号に俺はベッドから飛び起きた。

と思ったらベッドはなく、周りは赤い光で覆われていた。目が痛い。

「やっと、起きたか。まったくこんなクソガキが俺の孫だとはな」
「誰がクソガキじゃい、お前も変わらん歳だろうが」
相手に向かって人差し指を向けたが、その後の言葉が続かなくなってしまった。
目の前にいるのは、俺だった。鏡か。
「ほう、おじい様に向かってそんな舐めた口を利くとは、なかなかいい度胸しとるようだな」
「お、おじい……ちゃん？」
そういえば、やたらばあちゃんが「似てるわ～似てるわ～」と騒いでいたことがあったな。ここまで似ているとは、恐るべし隔世遺伝。
「クソガキ、話聞いてるのか」
でも、俺はこんなに口悪くない。
「なに、じっちゃん、そろそろ起きてくんの」
「いや、俺はもう目覚めることはない」
「つくづく女を不幸にする男だな」
ものすごい殺気が発せられ、俺は少々体が縮んだ。
じいちゃんは、俺が生まれるずっと前から病院で寝たきりの状態だ。初めはそんなに長生きできないだろと思われていたが、医療の発達により普通の老人並みに長生きしている。ばあちゃんは、いつ目を覚ましてもいいように準備を怠ることはなく、今までじっちゃんとまた会える日を待ち望んでいたのに。
「カヨにはもう挨拶は済ました。お前が気にすることじゃない」
いや、気になります。
「それよりも、お前に頼みがある」
「遺言とか勘弁してくれよ」
じいちゃんはため息をついて「こいつしかいねぇのか……」とかぶつくさ言いだした。
「もうすぐ俺は死ぬ。そしたら俺の病室の前で泣いている若い女がいるから、そいつを笑わせてみろ」

はい？
今まで聞いた怪談話のどれよりも意味が解らないぞ、この幽霊の話は。
「その人、だれ」
「大事な友人の孫だ」
「なんで、俺」
「お前じゃないとできない」
じいちゃんの哀愁だたよう視線を浴びていると、それ以上なにも言えなくなってきた。このままだと引き受けてしまう。そんなわけ解らん約束できるわけがない。
「言っておくが、これは約束じゃねぇ。契約だ。破ったら大学入試を受けさせないように妨害する」
「それ契約じゃなくて脅迫だから」
断ることができなくなってしまった。しかし、じいちゃんもこんな俺に頼みに来るぐらいだから、本当に俺にしかできないような難題なんだろう。
「でも、どうやったら笑わせられるんだ」
「それは――」
じいちゃんは真っ直ぐに俺を見つめた。
「お前らはたくさん時間があるんだ。自分で考えろ」
そう言って、じいちゃんは闇の彼方へと消えていった。
ちょ、じいちゃん、そんな無茶な。
いくら自分に時間がないからって無茶ぶりすぎるぜ。

ベッドから起き上がると、リビングで両親たちが忙しなく動いていた。俺も慌てて風呂に入って身支度する。
かあちゃんは俺のさっぱりした顔を見るなり「さきに病院行ってるから」と言ってさっさと出て行ってしまった。一週間ぶりに会話

したんだが、かあちゃんは俺がどこに行こうとしているのかわかったんだろうか。
病院の前で、俺は戸惑っていた。マジで友人の孫とやらいたらどしよう。もう、じいちゃんは死んでいるはずだ。だとしたら、どこからか俺を観察しているに違いない。下手したら、浪人――。いや、来年は大学受験すらできないかもしれない。
絶対にミスは許されない。
俺は緊張した面持ちで、じいちゃんの病室へと向かう。
病室の前で親戚たちが集まっていた。
その集団から少し離れて、両手で顔を塞いでいる女の子がいる。
あの子か？　若い女なんて言い方するから、年上の女子大生ぐらいかと思っていたのでさらに緊張した。
どうしよう、どうやって声掛けよう。
彼女に振られてから、どうやら俺は女性不信になっているようだ。戻ってこい、昔の俺、カムバック。
「あの……」
そこまで言って、俺は気づいた。名前聞いてねええ！！！
女の子は小さくな頭を垂れて、規則的に体を震わせて泣いていた。どうして、人のジジィにそこまで悲しんでくれるのかはわからない。
じいちゃんとどういう関係だったかはわからない、けど、もうじいちゃんはいないんだ。
俺は代わりになれるのだろうか。
女の子の小さな頭に、手を優しく乗せた。
女の子はゆっくりと頭をあげ、俺の顔を見ると真っ赤な目を大きく見開いて驚いていた。
「だいじょう、ぶ？」
俺はとても平凡なセリフを吐いてしまったが、女の子は涙にぬれた瞳を細め、とても、とても優しそうに微笑んだ。
「はじめまして」

「はじめまして」

おわり

4（後書き）

読んで下さり誠にありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3080t/

夢中授業

2011年5月15日23時55分発行